

## 優秀賞

「笑顔」

松山市立雄新中学校 3年

菊池 美生

「モザンビークの子どもたちに文房具を送りたいと思います。使い古しでもかまいません。ご協力お願いします。」

小さい頃、近くのスーパーマーケットのレジの近くにあった貼り紙。漢字が読めなくて母に読んでもらった。その頃の私は、漢字だけではなく、読んでもらっても意味さえわからなかった。小学校に入学したとき、やっとその貼り紙の意味が理解できた。あの貼り紙は私の小学校の児童が書いたものだった。

モザンビークはアフリカ大陸の南東部に位置する国である。かつてはポルトガルの植民地だった。1975年に独立した後も内戦に苦しみ、現在でも教育制度が十分に整っていない。学校建設や教員数の確保が人口増加に追いついていないようだ。多くのモザンビークの子どもたちは、生活のために農場で働かねばならず、学校に通えていないそうである。2015年のユニセフ・ユネスコ統計研究所の報告によると、モザンビークだけでなく、「世界で1億2100万人の子どもが一度も学校に通えてない、もしくは中退している」そうである。

小学生の時、生活科や総合的な学習の時間の授業で私は様々なことを学んだ。モザンビーク料理を作って、モザンビークの食生活に触れた。モザンビークの留学生の方と対話して、モザンビークの生活や環境の現状について知った。発展途上の国で国際貢献をしている方の講演を聞いて、日本がとても平和で恵まれた国であることや、国と国とのつながりの大切さに気付かされた。

これらの体験は、日本で当たり前だとされていることが他の国では当たり前とは限らないことを私に教えてくれた。だからこそ、日本以外の国のことをもっと知り、理解することが必要なのだと考えるきっかけを与えてくれた。これらの学習を通して、小学生の私たちにできることを考えた。その結果がモザンビークの小学生に文房具を送ること、使わなくなったランドセルを送ることだった。私は使命感に燃え、六年生の時には毎日終わりの会で支援を呼び掛ける校内放送をした。また、地域のお店に募金箱設置のお願いに行ったり、公民館で自分たちが作った手芸作品を売って募金したりした。

私がそんなにも一生懸命になった理由はただ一つである。お礼の手紙に同封された一枚の写真だった。モザンビークでランドセルを受け取った女の子が笑顔で写っていた。小学生の自分が、他人を、しかも遠く離れた国に住む知らない女の子を、こんなにも笑顔にできるなんて…とても幸せな気持ちになったことを私はこれからもずっと忘れない。

誰かのために、今の自分にできることを実践していく。それを世界中の人々が実践できたなら、きっと私が見た笑顔の子どもが世界中に増えていくだろう。そして、それが世界を平和にし、持続可能な社会を実現することにつながるのではないかと私は考えている。